

フンボルト将来の絵文書資料に関する 文献学的考察

小 林 致 広

I. はじめに

1799年から1804年にかけてのアメリカ大陸の調査旅行において、アレクサンダー・フォン・フンボルトは、持参した近代的計測機器を駆使しながら、標高や経緯度の測定、地磁気や大気組成の計測など、さまざまな調査を実施している。フンボルトは、こうした基礎データの収集だけでなく地質調査や植物標本採集も行っていた。一方で、調査する地域によって研究・調査の関心が少しずつ変化したことも明白である（小林1986）。

調査の初期のオリノコ川流域のリャノスでは動植物に関する博物学的調査、中期のエクアドルのアンデス高地では地質・土壌・植生に関する自然地理学的調査が中心となっている。一方、1803年3月から1804年3月のメキシコ（当時はヌエバ・エスパニーヤ副王領）滞在中は、フンボルトの研究活動の中心軸は広い意味での人文地理学的調査に移動していた。それが可能となった背景には、当時の植民地の中心だったメキシコには、西欧の近代的な科学知識が積極的に導入され、本国スペインから派遣された知識人によっていくつかの学術研究機関が設立されていたことがある。

1783年に発足した王立鉱山セミナー（Seminario Real de Minería）では、地質学・鉱物学・地図作成に関する教育や研究・調査が行われていた。1788年、王立鉱山セミナーはメキシコ鉱山学校（Colegio de Minería de México）に昇格し、ザクセンのフライベルク鉱山学校¹⁾に留学していたファスト・デ・エルヤル（Fausto d'Elhuyar）が初代鉱山学校学長となった。彼とともに来墨した10名のドイツ人技師がメキシコ鉱山学校スタッフとなっていた。一方、王立植物園（Jardín Real Botánico）は、1788年スペインから派遣された植物学調査隊責任者マルティン・セセ・イ・ラ

カスタ (Martín de Sessé y Lacasta)²⁾ によって 1791 年に設立されている。こうした学術研究機関の活動によって、地質学、鉱山学、植物学に関しては、一定のデータが蓄積していた。そのため、フンボルト自身は南米の調査とは異なる分野に関心を注ぐことができたといえよう。

1803 年 3 月 23 日から 1804 年 3 月 7 日までのメキシコ滞在中のフンボルトの仕事は、メキシコ各地の巡検・視察と現地調査、首都メキシコでの各種資料の収集、知識人との交流、ならびに大学などでの講義、地図や報告書の作成にわたることができる。地方巡検においては、おもにタスコ (Taxco)、グアナフアト (Guanajuato)、パチューカ (Pachuca) などのメキシコの主要な鉱山を訪問している。とくにグアナフアトには 1803 年 8 月 8 日から 9 月 9 日まで 1 ヶ月滞在し、ルル・デ・バレンシア (Rul de Valencia) 伯爵の居館を本拠として、鉱山の視察や鉱山関係の資料の収集に携わっていた。

また、ホルーリヨ (Jorullo)、ネバード・デ・トルーカ (Nevado de Toluca)、ポポカテペトル (Popocatepetl)、コフレ・デ・ペローテ (Cofre de Perote) のなどメキシコ中央高原南縁部に分布する火山の現地調査も精力的に行っている。こうした巡検の途次、各地で地質調査、経緯度や高度の測定を行っていることは言うまでもない。また、メキシコへの上陸港アカプルコと出発港ベラクルスの 2 大港湾都市には、それぞれ 4 週間と 2 週間滞在し、港湾一帯の地形図や海図作成の基礎データの取得のための計測を行っている。

一方、約 7 カ月に及ぶ首都滞在中、フンボルトはメキシコ鉱山学校の金属学セミナーで講義や技術指導を行うとともに、在学生の協力でヌエバ・エスパーニャの地図の編集を行っている。鉱山学校での講義の一部は、『地質図表記入門 (Introducción a la pasigrafía geológica)』として刊行されている。首都滞在中、フンボルトは、鉱山学校の技術者、王立植物園の植物学者だけでなく、メキシコ大学やサンカルロス芸術学院 (Academia de San Carlos) の知識人と緊密に交流していた。

同時に、ヌエバ・エスパーニャ副王庁が作成したセンサスや統計、内部資料の収集も行っている。フンボルトはこうした統計資料類を整理し、『ヌエバ・エスパーニャ王国政治地理表』(Tablas geográficas políticas del Reino de Nueva España、以下『政

治地理表』と略)にまとめ、副王イトゥリガライ (José de Iturrigaray) に献呈している。この小冊子には、面積と人口、主要都市、農業、製造業、国家財政、鉱業、軍事力の7項目についての簡単な記述があり、フンボルトが1811年にパリで出版することになる『ヌエバ・エスパーニャ王国政治論』(Essai Politique sur le Royaume de la Nouvelle Espagne、以下『政治論』と略)の素案ともいえるものである³⁾。

首都での資料収集の過程において、フンボルトは以前から気にかかっていた文書群の探索に当たっている。それは追放イエズス会士クラビエロ (Francisco Clavigero) の『メキシコ古代史』(Storia Antica di Messico) で言及されている副王庁当局が接収したボトゥリニ・コレクション (以下、コレクションと略) である。当初、探していたメキシコ大学の文書館には、最近作成された出来の悪い数点のコピーしかなく、コレクションの本体は副王庁文書館に移されていた。1803年7月8日付けの日記に、副王庁文書館でコレクションの残骸に遭遇した時の様子が記されている (Humboldt 1986: 329-332)。その後、フンボルトはコレクションの一部を入手し持ち帰った。これが本稿で分析するフンボルト将来の絵文書史料、フンボルト絵文書断片 (Códice Humboldt Fragmento) である。

1892年の「コロンブス400周年記念」の際、フンボルト絵文書断片は写真版として出版されている⁴⁾。『1803年アレクサンダー・フォン・フンボルト収集のヌエバ・エスパーニャ王国のアステカの歴史的象形文字』(Historischen Hieroglyphen der Azteken im Jahr 1803 im Königreiche Neu-Spanien gesammelt von Alexander von Humboldt) という表題で、資料所蔵者の国立文書館から出版されたものである。出版に携わった文献学者ゼーラー (Eduardo Seler) が解説した『ベルリン帝国文書館のアレクサンダー・フォン・フンボルト将来のメキシコ絵文書』は、1世紀以上経過した現在でも、フンボルト絵文書断片に関する古典的な解説書とされている (Seler 1903: 1904)。

その後、フンボルト絵文書断片と関連する絵文書群が新たに発見されている。その代表的な例は、ゲレロ州東部海岸地方のアソユー (Azoyú) で1940年に発見された『アソユー絵文書1・2』である。これらの新資料の発見によって、フンボルト絵文書断片を本来の歴史的文脈のなかに位置づけて評価することが要請されている。フンボル

ト絵文書断片の再検討によって、接触期前後のメキシコ中央高原地域の民族史学研究における主要テーマの解明に貢献することも可能となっている。本稿では、フンボルト絵文書断片の再検討に不可欠な文献学的な予備的考察を行い、個々の絵文書断片の具体的な分析は別稿で試みることにしたい。

II. フンボルトの先スペイン期メキシコに関する関心

1804年8月にパリに帰ったフンボルトは、パリの出版社から『アレクサンドレ・ド・フンボルトとアイメ・ボンプランによる1799、1800、1801、1802、1803、1804年の新大陸赤道地方の航海』と題する豪華本を1805年から刊行することになる。1804年9月にスイス・ジュネーブの博物学者ピクテ（M.A.Pictet）と会った際、アメリカ調査旅行に関する4巻の本を6つの言語で出版したいと語っていたとされる（Ortega y Medina 1973: cv）。5ヶ月後の1805年2月3日付のピクテ宛の書簡では、アメリカ調査旅行の報告書を11巻構成で出版したいという構想が述べられている（表1参照）。しかし、構想は肥大化し、最終的には1834年までかって、全30巻が刊行されることになる。

表1：フンボルトのアメリカ調査旅行報告書の初期の構想

巻	表題	巻	表題	巻	表題	巻	表題
1	赤道地帯植物	2	赤道地帯植物新種	3	植物地理学論	4	探検簡略誌
5	天体観測と測地	6	地磁気観測	7	地質図表記法	8	地質図
9	天体観測基礎図	10	熱帯旅行4巻	11	メキシコ統計（スペイン王提出のコピー）		

出典：Hamy 1904: 181-84.

このうち初期構想の第11巻は『政治地理表』の増補版であり、実際には『政治論』となって出版されるものに相当する。一方、初期構想の第10巻では、「熱帯旅行、すなわち1799年から1804年、大西洋、新大陸内陸部、南米の一部で行った観測」を4巻本でまとめる予定だった。具体的内容として、「メキシコ古代地図（Atlas d'antiquités mexicaines）、チンボラソ（Chimborazo）の眺望、 Cholula のピラミッド」などが扱われる予定であった。その内容構成から、初期構想の第10巻は1810年出版の『アメリカ大陸山岳誌と先住民モニュメント』（*Veus des*

cordillères, et monumens des peuples indigènes de l'Amérique、以下『先住民モニュメント』と略)に対応するものと分かる。「メキシコ古代地図」には、メキシコ滞在中に入手した古代メキシコに関する絵画的資料 10 点、フンボルトが作成した Cholula のピラミッド、レグラ滝 (Cascada Regla)、ホルーリョ火山、コフレ・デ・ペローテ火山、アクトパン (Actopan) の柱状サボテン型の山、ハカル (Jacal) 山の景観画 6 点が所収されるはずだった (Wionczek 1974: xvi)。

フンボルトがメキシコに関する著作の第 1 巻を書き始めたのは、1805 年 3 月頃とされている (Ortega y Medina 1973: cv)。しかし、自然科学的な観測のデータの整理には予想以上の時間がかかることが判明していた。さらに、1805 年初夏、兄ヴィルヘルムを訪ねてローマに滞在した際に当地の博物館で様々なメキシコの絵文書を閲覧したことなどもあり、当初の構想は徐々に変更されていく。訪問先のローマから生地ベルリンに帰る途中で、ベルリンの出版業者に宛てた 1805 年 10 月 28 日付書簡で、「バチカン絵文書やボルジア絵文書の一部はすでに転写したので、ウィーン絵文書と [メキシコで入手した] 私の絵文書との比較に全霊を注げて取り組みたい」(Hamy 1904: 200) と述べている。手紙が書かれた 3 日前、ナポレオンはベルリンに入城しており、プロシア政府がフンボルトにウィーン訪問を許可しないことは目に見えていた。ウィーン文書館所蔵のヴィンドボネンシス絵文書 (Códice Vindobonensis) を閲覧する機会は、1811 年に兄ヴィルヘルムが滞在するウィーン訪問まで先延ばしされることになった⁵⁾。

最終的に、フンボルトがメキシコ調査旅行に関連して刊行した著作は、①『先住民モニュメント』(1810 年、2 巻)、②『ヌエバ・エスパーニャ王国地図帳』(*Atlas géographique et physique de royaume de la Nouvelle-Espagne*、以下『地図帳』と略、1811 年)、③『政治論』(1807–11 年、2 巻) の 3 点である。これらのメキシコ関係の著作は 1811 年までに刊行され、他の著作と比べて比較的早い段階に出版されている。豪華版出版の直後から、この 3 点の廉価版の出版、ドイツ語、英語やスペイン語など他言語での翻訳出版も相次いで行われている (Humboldt 1810b; 1812a; 1812b; 1813; 1814; 1818)。

『地図帳』には 28 葉の地図や図表類が所収されているが、フンボルト自身が作成し

たものは、アカプルコーメキシコ市—ベラクルス間の地形断面図、ならびにメキシコ盆地の排水施設 (desagüe) 一帯の地質図と地質断面図に限られているといってよい。フンボルトが踏査できなかった地域に関する地図の大部分は、既に作成されていた地図に依拠して作成されている。メキシコ盆地の地図に関しては鉱山学校技師ルイス・マルティン (Luis Martín) が作成したもの、ヌエバ・エスパーニャ全域に関しては、アルサーテ (Alzate y Ramírez) やホアキン・ベラスケス (Joaquín Velázquez) が作成していたもの、ヌエバ・エスパーニャ北部辺境地帯に関しては、国境防衛のためにニコラス・ラフォラ (Nicolás Lafora) が作成したものが、『地図帳』の元図として利用されている。

一方、『政治論』は『政治地理表』に地図や他国との比較を加えるという当初の構想が肥大化し、約 120 種の未刊行資料、27 種の地図、約 130 種の刊行資料を駆使した大部の著作となってしまった。『政治地理表』の章構成を踏襲したため、近代的な地誌としての体系化を欠如し、本題から逸脱した記述や不適切な統計処理が散見される。しかし、『政治論』は「近代的な地域経済地理学」の基礎を作ったものと評価されている (Brando 1959)。

先スペイン期の先住民の文化や歴史が最も多く扱われている『先住民モニュメント』の記述から判断するかぎり、メキシコを来訪した段階でフンボルトが先スペイン期の先住民の文化や歴史に特別に関心を抱いていた形跡はあまり見当たらない。実際、メキシコ滞在中に彼が実際に赴いた考古学的遺跡は、現プエブラ州の Cholula 遺跡だけである。フンボルトは、植生に覆われ頂上部に教会が建つ Cholula のピラミッド基部を測量し、その面積を 2,400 平方メートルと算定し、北部に露出するピラミッド基部のスケッチも残している。同時に、ポポカテペトル、イスタシワトル (Iztaccihuatl)、オリサバ山 (Pico de Orizaba)、そしてトラスカラ山地 [マリンチェ (Malinche)] など周辺の高山の高度測定など数多くの天体観測も行ったと述べている (Humboldt 1813: 52)。

フンボルトは調査旅行の行程のごく近くに位置している著名な遺跡も訪問していない。ゲレロ州のショチカルコ (Xochicalco) 遺跡に関して、「南の海 [太平洋] からヌエバ・エスパーニャに着いた後、1803 年 4 月にアカプルコからクエルナバカ

(Cuernavaca)に向かったが、ショチカルコの丘があるとは知らなかった。残念ながら、直接自分の目で確認はできなかった」と述べている (Humboldt 1813: 41)。また、メキシコ市郊外のテオティワカン (Teotihuacan) 遺跡の太陽や月のピラミッドなどに言及しているが、フンボルトは現地を訪れてはいない。『先住民モニュメント』でメキシコとエジプトのピラミッドの規模の比較に用いた資料は、1803年に鉱山学校学生オテイサ (Juan José Oteyza) が計測・作成したテオティワカンの太陽のピラミッドのスケッチである (Humboldt 1813: 26)。

フンボルトがメキシコを訪問する10年前の1790年から1971年にかけて、メキシコ市中央広場の一角で、「太陽の暦石」、ティソックの石 (Piedra de Tizoc)、そしてコアトリクエ巨像 (Coatlicue) という先スペイン期の石造モニュメントが相次いで発見されていた⁵⁾。1803年7月、フンボルトはこれらの石像モニュメントを説明つきで観察する機会を得ている。「太陽の暦石」とティソックの石の二つは、メキシコ大学構内に保管されていた。しかし、コアトリクエ巨像は異教的要素が強く、若者に悪影響を及ぼすとして、構内の地下に埋め戻されていた。フンボルトは、モンテレイ大司教フェリシアーノ・マリン (Felicano Marín) を通じて、埋め戻されていた偶像を再発掘するようにメキシコ大学総長に依頼し、実物を観察することができた (Humboldt 1986: 324-25)。

フンボルトがメキシコの先スペイン期の歴史や文化への関心を深めるようになった理由はいくつか考えられる。『先住民モニュメント』の「太陽の暦石」の項で、「太陽の暦石」の絵文字やメキシコ市サンフェリペ・ネリ修道院所蔵の絵文書を見たことで、古代メキシコの絵文字に興味を抱くようになったと述べている (Humboldt 1813: 127)。修道院長ピチャルド神父 (José Antonio Pichardo) に見せてもらった絵文書にはアステカ最後の領主クアウテモック (Cuauhtemoc) の拷問と絞首刑の様子が描かれていたという (Humboldt 1974: 123)。この絵文書資料はテペチュパン絵巻 (Tira de Tepechpan) と考えられる (図1参照)。しかし、チマルパイン (Domingo Chimalpahin) やテソソモック (Hernando de Alvarado Tezozómoc) のナワトル語資料を読めず、シグエンサ (Carlos de Sigüenza y Góngora)、ポトゥリニ、クラビヘロ、レオン・イ・ガマ (Antonio de León y Gama) など先行研究者の説の妥当性

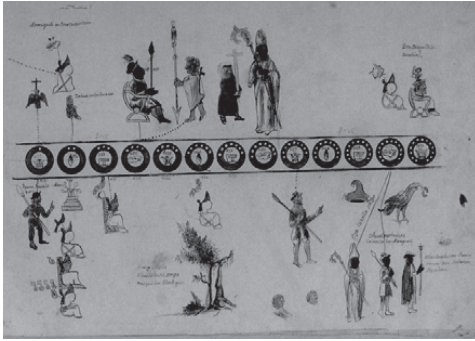


図1：テペチュパン絵巻
(ピチャルド神父写本 folio 17、出所－Amoxcalli)

を判断できないと嘆いている（Humboldt 1813: 127）。

ヨーロッパに帰ったフンボルトは、1805年の春から夏、ローマのバチカン文書館で絵文書資料を調査している（Humboldt 1813: 127）。調査の当初の目的は、アステカの時間区分と閏年の概念に関連する既往の研究を収集するためだった。こうした資

料収集の作業の過程を通じて、フンボルトの中で先スペイン期のアメリカ先住民の書記体系に関する関心が高まったようである（Wionczek 1974: xvii）。

本稿で考察の対象とするフンボルト絵文書断片に関しては、『先住民モニュメント』において言及されている。しかし、『先住民モニュメント』の廉価版や翻訳版の多くでは、豪華本で69点あった挿絵の一部しか採用されておらず、図版も彩色のないものとなっている。本稿では、図版がすべて採録されているパリのSchoell社から1813年に刊行された版を参照テキストとして採用する⁷⁾。

『先住民モニュメント』には、山岳誌と先住民モニュメントに関する69点の挿絵が付されている。『先住民モニュメント』の序論では、先住民モニュメントとしては、メキシコ、ペルー（4点）、南米の先住民族ムイスカ（Muysucas）の居住するコロンビア（2点）の3地域、山岳誌としては、メキシコ高原（6点）と南米山脈（16点）を扱う方針が表明されている⁸⁾。しかし、実質的には、ヌエバ・エスパーニャ副王領に関連する挿絵（42点）や記述（180頁）が、『先住民モニュメント』全体の個別的記述の約6割を占めている（表2参照）。ヌエバ・エスパーニャ副王領関連のものが3分の2という比率は、初期構想の第10巻「熱帯旅行」で示されていた3部構成「メキシコ古代地図、チンボラソの眺望、 Cholulra のピラミッド」をほぼ反映したものといえよう。

ヌエバ・エスパーニャ副王領関係の42点の挿絵のなかには、フンボルト自身が現地で作成した写生で、出版時にエッチングで挿絵を作成する際の原因となっているものもある。南米のアンデスの山岳、吊橋、筏などの風景画6点は、リトグラフによる

表 2 : 『先住民モニュメント』のヌエバ・エスパーニャ副王領関係の図版と構成

番号	タイトル	該当頁	図版など資料提供者
1/2	アステカ女性神官坐像	4-7	Dupé, 芸術学校学生
3	メキシコ中央広場景観	7-9	芸術学校長 Ximmeno
7	チョルーラ・ピラミッド	24-36	フンボルト写生?
8	チョルーラ・ピラミッド分離部	36-37	フンボルト写生?
9	ショチカルコ遺跡	37-41	José de Alzate
11	「オアハカのメキシコレリーフ」	47-51	Vicente Cervantes
12	アスカボツァルコ貴族系譜／絵文字訴訟記録	51-56	CHF 2, 6
13	パチカン文書館アステカ絵文字草稿	57-86	パチカン絵文書 3776
14	モクテスマ時代絵師描写の衣装	87-89	パチカン絵文書 3738
15	ベレトリの草稿のアステカ絵文字	89-101	ボルジア絵文書
21	メキシコ中央広場出土土筒石盤浮き彫り	118-22	ティソックの石、Dupé
22	レグラの玄武岩と滝	122-24	<u>フンボルト写生</u>
23	メキシコ暦を表す玄武岩の浅浮き彫り	125-94	アステカの暦石、León y Gama
26	アステカ神話における自然時代区分	202-11	パチカン絵文書 3738
27	メキシコ暦の絵文字と日の記号	212-13	ボルジア絵文書
28	アステカの石斧	214	Andrés Manuel del Río
29	メキシコ中央広場出土玄武岩アステカ偶像	214-20	コアトリクエ巨像、León y Gama
32	大洪水からメキシコ創設のアステカ絵文字歴史	223-30	シグエンサ地図
34	コフレ・デ・ペローテ	233	<u>フンボルト写生</u>
36	ベルリン王立文書館アステカ絵文書断片	234-35	CHF1,8,10,11,12,13,15
37	ベレトリのボルジア絵文書アステカ絵文字	235-37	ボルジア絵文書
38	アステカの移動	237-38	CHF 3
39	ホンジュラス海岸発見花崗岩製杯	238-39	Thomas Bolnal
40	メキシコ盆地出土の玄武岩偶像	239	
43	ホルーリョ火山	242-44	<u>フンボルト写生</u>
45	ドレスデン王立文書館絵文書断片	266-67	ドレスデン絵文書
46~48	ウィーン帝国文書館アステカ草稿絵文書 1~3	267-70	ヴィンドボネンシス絵文書
49	オアハカ地方ミトラ死者の家遺跡、平・立面図	270-75	Luis Martín, C.de la Laguna
50	オアハカ地方ミトラ死者の家遺跡	270-75	Luis Martín, C.de la Laguna
52/53	メチョアカンのインディオの衣装	275	
55/56	テレリアーノ・レメンシス絵文書断片	279-83	テレリャーノ・レメンシス絵文書
57	キリスト教暦の断片	283	CHF16
58/59	メンドサ収集絵文書	285-89	メンドサ絵文書
60	パチカン文書館アステカ絵文字草稿	291	パチカン絵文書 3738
64	アクトパンの柱状サボテン型尖塔	296	<u>フンボルト写生</u>
65	ハカルの列状の斑岩山塊	296	<u>フンボルト写生</u>

該当頁は 1813 年版の頁数。CHF: フンボルト絵文書断片。

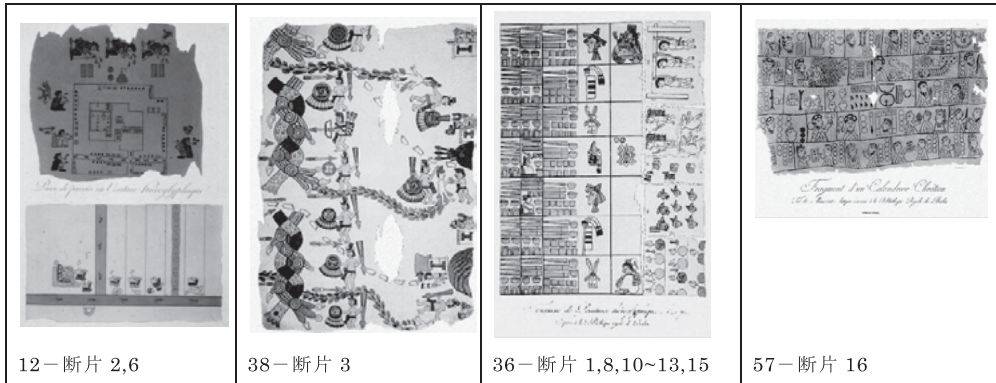


図2：『先住民モニュメント』記載のフンボルト絵文書断片



図3：『先住民モニュメント』記載の他の絵文書 一（ ）内は1813年版の挿絵番号

表 3 :『先住民モニュメント』で参照されたアメリカ関係文献

著者	年度	資料名	
16 世紀			
Hernan Cortés	1524	Cartas de Hernán Cortes (Lorenzana 1770)	
Francisco López de Gómara	1552	Historia de la conquista de México	
Bernal Díaz del Castillo	1575	Historia verdadera de la conquista de la Nueva España	
Diego Valdés	1579	Rhétorica Christiana	
Toribio de Motolinía		Historia de los indios de Nueva España/ Memoriales	
17 世紀			
Domingo Chimalpahin		Las ocho relaciones y el memorial de Colhuacan	
Juan de Torquemada	1615	Monarquía indiana	
Samuel Purchas	1625	Purchas his Pilgrimage, 5 vols.	
Melchisedec Thevenot	1672	Relationes de divers voyages curieux	
Carlos Sigüenza y Góngora	1680	Libra astronómica	
Daniel de Nessel	1690	Catalogo Bibliotheca Caesarae	
Fray Agustín Vetancurt	1698	Teatro Mexicano	
G. Fco. Gemalli Carreri	1700	Giro del mondo	
18 世紀～19 世紀初頭			
L. Boturini de Benaducci	1746	Idea de una historia general de la América septentorial	
JohannChristen Götze	1743/44	Denkwüdrigkeiten der Dresdener Bibliothek,1te Sammlung	
Carlos de Tapia Zenteno	1753	Arte novissima de la lengua mexicana	
P. Lambecius	1766	Commentar de bibliotheca Caesar Vindobonensis	
Fco. Antonio Lorenzana	1770	Historia de la Nueva España escrita por Hernán Cortez…	
Cornelius de Pauw	1771	Recerches philosophiques sur les Americains	
Fco. Javier Clavijero	1780	Storia antica di Messico	
J.de Antonio Alzate y Ramírez	1791	Descripción de las antigüedades de Xochicalco	
Antonio de León y Gama	1792	Descripción histórica y cronológica de las dos piedras	
José Lino Fábrega	1792/97	Interpretación de Códice Borgia	
Giorgio Zoega	1797	De orgine et usu obeliscorum	
William Robertson	1803	History of America, book 5	
Pedro Marquez	1804	Due antichi Monumenti di architettura messicana	
Nils Gustaf Palin	1812	De l’Etude des hieroglyphes	
図版・スケッチ			
Juan José Oteyza	太陽のピラミッド	Andrés Manuel de Río	アステカ石斧
Guillermo Dupaix	アステカ神官像	Luis Martín	ミトラ遺跡図面
Pedro Marquez	ショチカルコ遺跡レリーフ	Pedro de la Laguna	ミトラ壁面イラスト
Cervantes	「オアハカのレリーフ」	Ximmeno	メキシコ中央広場図
Tomás Pownal	モスキート海岸出土花崗岩杯		

彩色が施されているが、メキシコ関係の風景の挿絵はすべてモノクロ印刷となっている。フンボルトの写生であったことが確実なのは、火山や火山地形に関係した5点であるが、 Cholula のピラミッドに関連する2つの挿絵はフンボルトの写生によるものと考えてよいだろう。一方、ショチカルコ遺跡やミトラ遺跡、「太陽の暦石」やティソックの石などの考古学的出土品などの挿絵は、既に報告書などに載せられていた図版、あるいは研究者が作成した挿絵⁹⁾が転用されている(表2、表3参照)。

いわゆる絵文書関連の挿絵資料は16点あり、うち4点がメキシコ滞在中に入手したフンボルト絵文書断片関連のものとなっている(図2参照)。他の12点の挿絵は、アメリカ大陸調査旅行の後、フンボルトがヨーロッパ各地(バチカン、ウィーン、パリ、ドレスデン)の文書館で行った資料調査、あるいは既に発表されていた絵文書関連の文献やカタログから得たデータが使われている(図3参照)。

「ベレトリのボルジア博物館絵文書」の項の挿絵10点(ボルジア絵文書フォリオ15、17、20、22、34、49、53の一部)、「ベレトリのボルジア絵文書のアステカ絵文字」の項の挿絵10点(ボルジア絵文書フォリオ10、11、23、24、33、47、56、58の一部)など、ボルジア絵文書の模写・複製には、フンボルトが直接携わっていたという。その理由について、「メキシコの儀礼の様子を描いている絵文書の完全な復刻¹⁰⁾が近いうちには望めそうもない」ので、「迷信深い凶暴な民族の習慣を描いた代表的な画像」を数多く選んで模写したと述べている(Humboldt 1813: 255)。

『先住民モニュメント』におけるフンボルト絵文書断片4件に関する記述は11頁だが、ヨーロッパで閲覧した絵文書資料関係12件に関する記述は81頁となっている。1件当たりの平均記述頁に関しても、前者が3頁弱なのに対して、後者は7頁弱となっている。つまり、『先住民モニュメント』の絵文書関連の挿絵に関する記述は、アメリカ大陸旅行後にヨーロッパ各地の文書館などで閲覧した絵文書資料に関するものが圧倒的に多くなっている。このことは、フンボルト絵文書断片に関する基本データが少なかったことや、絵文書資料に対するフンボルトの中心的な関心が、親旧大陸の諸文明における暦法、世界創世神話、宗教体系、象形・絵文字など書記体系法の比較にあったことと関連している。

『先住民モニュメント』でもっとも記述量の多いのは、第23項の「アステカの暦石」

の70頁である。その大部分は、アジア（タタール、マンシュウ、チベット、日本など）とアメリカ（アステカ、チアパス、カナダ北西部）の数体系、暦（太陽暦、太陰暦と聖暦）や循環暦（60年と52年）の比較となっている。ついで分量の多いのは、第13項「バチカン絵文書3776」の30頁である。そこでは、旧大陸（エジプト、中国、チベット、日本）とアメリカ大陸（アステカ、ペルー）の象形・絵文字の関係、ヨーロッパとメキシコの文書館所蔵の絵文字資料に関する記述が展開されている。奇妙なことに、先スペイン期の3つのマヤ絵文書のひとつドレスデン絵文書の挿絵があるにもかかわらず、マヤ文字に関する言及はまったくない。アステカの宗教・神官制度に関しては第15項（12頁）、世界創世神話の比較に関しては第26項（10頁）で論究している。

『先住民モニュメント』でのフンボルト絵文書断片に関する記述や分析は、彼自身も認めているように（Humboldt 1986: 331）、いずれも2頁前後程度の「急ぎ足的なもの」だったと言ってよい。16点の絵文書断片すべてがアマーテ（amatl）紙に描かれているにもかかわらず、先住民の絵文書が描かれる素材を説明している箇所でも、竜舌欄（マゲイ maguey、ナワ語で metl）のことしか紹介していない（Humboldt 1813: 52, 234.）。彼の記述の多くは、個別の絵文書断片の内容に関する具体的な分析というより、地名絵符や人名絵符、命令や発言を示すための「吹き出し」（lengüete）の絵符、特権的貴族層に固有の權威的な衣装など、絵文字表記の解説に焦点が当てられている。

『先住民モニュメント』のフンボルト絵文書断片の4枚の挿絵のうち説明で記述の量がもっとも多いのは、フンボルトが「アスカポツァルコ貴族系譜」と名付けた絵文書断片2である。その理由として考えられるのは、この断片2の原本にアルファベットによる注記が付いていたことがある。しかし、フンボルトはメキシコ先住民族の絵文書の読み解きの原則を理解できていなかったようである。この系譜の解説は、最下段のモクテスマから始めるべきだが、フンボルトは最上段のティシュルピツィン（Tixlpitzin）から始めている。この人物をアストラン（Aztlán）出発時の指導者テクパルツィン（Tecpaltzin）、トルテカ最後の王トピルツィン（Topiltzin）と混同しないように念押しするなど、フンボルトは数多くの誤読を重ねている。処刑されたアステカ最後の領主クアウトモックの脇に1565年という年代が記入されていること、モ

クテスマの甥であるクアウテモックがアスカポツアルコ（Azcapotzalco）領主の系譜に連なっていることなどが不可解であるというフンボルトの指摘は、この絵文書断片2の本来の作成意図をフンボルト自身がまったく理解していなかったことを意味している¹¹⁾。

Ⅲ. ボトゥリニ・コレクションとフンボルト絵文書断片

『先住民モニュメント』では、4か所でフンボルト絵文書断片の複製が挿絵として使われている。しかし、一頁の挿絵の箇所に複数のフンボルト絵文書断片の挿絵が使われている例もある。挿絵38「アステカの移動」と挿絵57「キリスト教暦の断片」の場合、フンボルト絵文書断片3と16に該当するものが挿絵となっている。しかし、挿絵12「アスカポツアルコ貴族系譜／絵文字訴訟記録」の場合、表題からもわかるように2種類の断片が描かれている。しかも、前者のアスカポツアルコ貴族系譜の挿絵は、断片の下辺の一部だけが復刻されている。一方、挿絵36「ベルリン王立文書館アステカ絵文書断片」では、7種類のフンボルト絵文書断片から一部のシーンが抜き出され、復刻されている。

（1）ボトゥリニ・コレクション

フンボルトがドイツに持ち帰った16点の絵文書断片は、ミラノ出身の歴史家ボトゥリニ（Lorenzo Boturini de Benaduci, 1702-1755年）が1736年から1743年のメキシコ滞在中に収集した古文書や絵文書類、いわゆるボトゥリニ・コレクションにあったものと考えられている。ボトゥリニがメキシコに向かった本来の理由は、「聖母グアダルーペ出現の奇跡」に関する調査を行うためだった。絶えざる緊張とかさむ出費に耐えながら、聖俗の歴史にとって貴重な事物に満ちた博物館を手に入れようとしたが、「あらゆるスペイン人に対して極端な不信感を抱いているため、古い絵文書を隠し、地中に埋めたりするインディオたちと交渉するのは極めて難しく」、最初の2年間は何ひとつ成果が得られなかったという（Boturini 1974: 5, 113）。

1743年6月、副王セブリアン（Pedro Cebrián y Agustín）の命令でボトゥリニは

拘束され、彼が集めた大量のコレクションは接収された。副王庁文書館に留置されたコレクションに関しては、1743年9月、ボトゥリニの立ち会いで目録が作成されていた。1745年2月にボトゥリニはスペインに追放されたが、1746年にマドリードで『北アメリカの新しい通史に関する理念』（Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional）を刊行することができた。その付録に収集した古文書類一覧が「インディアス歴史博物館のカatalogo」（Catálogo del Museo Histórico Indiano）として掲載されている（Boturini 1974: 110-151、図4参照）。

このCatalogoに記載されている約500点の古文書類のうち、グアダルーペ信仰に関する資料は5パーセントしかなく、聖母グアダルーペ出現の奇跡に関する著作を刊行するというボトゥリニの当初の夢は実現しなかった。しかし、ボトゥリニが苦勞して収集した古文書や絵文書類は、メキシコ中央高原の先スペイン期のエスノヒストリー研究にとって不可欠となる貴重な歴史資料であると評価されている。

1745年まで、コレクションは副王庁の王室保管庫（Real Caja）に留置されていた。その後、コレクションの保管場所は次々と変わり、収集されていた大量の古文書や絵文書類は散逸していく。コレクションを最初に利用したのは、『メキシコ古代史』（Historia antigua de México）の著者ベイティア（Mariano Fernández Echeverría y Veytia、1718-1779年）である。父親に伴われ1739年からスペインに滞在していたベイティアは、メキシコ追放後マドリーに滞在していたボトゥリニと知り合うことになった。1750年、メキシコに帰ったベイティアは、副王グエメス（Juan Francisco Güemes y Horcasitas）の閲覧許可を得て、メキシコ古代史研究に必要な資料収集を

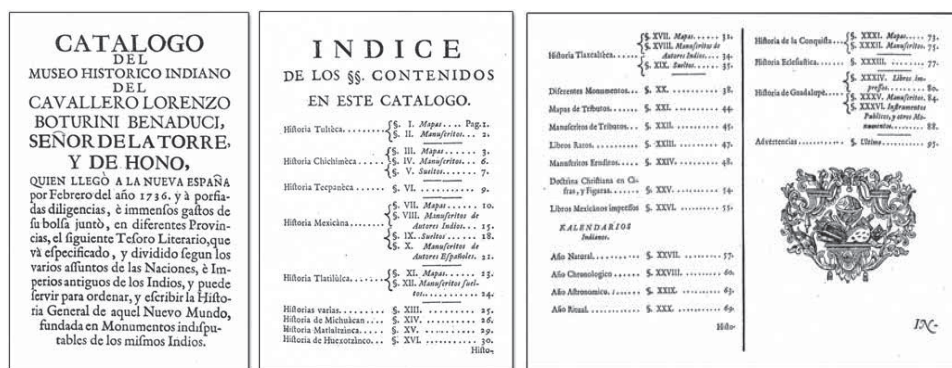


図4：「インディアス歴史博物館」Catalogoと索引

始めることになった。1751 年から 1756 年、バイティアは副王庁統治文書部(Escribanía de Gobierno) に保管されていたコレクションを閲覧することができた (Moreno Bonett 1978: 482)。

その後、メキシコ大司教ロレンサナ (Francisco Antonio Lorenzana、在職 1766 - 72 年) は、コルテスの征服活動を中心としたヌエバ・エスパーニャ史を執筆するため、コレクションの一部を借り出していた。大司教の著作『ヌエバ・エスパーニャ史』は、1770 年にメキシコで出版されている。そこにはメキシコ征服事業に関するコルテスの 5 書簡、バタンクールの『メキシコ劇場』(Teatro Mexicano) の要約¹²⁾ などとともに、「モクテスマ皇帝に納めていた貢納図断片集」(Fragmentos de un mapa de Tributo) の挿絵 30 枚も所収されていた。この貢納図断片集は、現在は「貢納表 (Matrícula de Tributos)」として知られるモクテスマへの貢納記録を写したものであることは明白である。図 5 はトラテロルコ貢納地区に関する 3 種類の記録を示したものであるが、現在の「貢納表」では失われてしまっている箇所が、1770 年当時はまだ欠損していなかったことが分かる。その欠損部分を補ううえでも、貢納図断片集は、1540 年頃に「貢納表」を転写したとされるメンドサ絵文書第 II 部とともに不可欠な資料となっている (図 5 参照)。

大司教の著作刊行の翌年の 1771 年、コレクションはメキシコ大学に移管されることになった。1778 年にコレクションが副王庁の議会事務局に返却された際も、その一部は大学図書館に残されたままだった。1780 年 5 月、スペイン本国から、バイティアの原稿と複写していたコレクションの関連資料の回収、クラビヘロが言及している

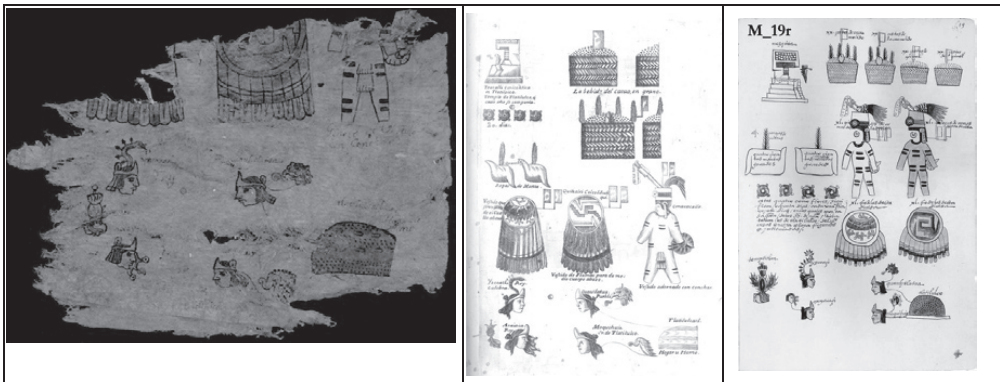


図 5 : トラテロルコ貢納地区 (左は貢納表 f.3、中は貢納図断片 2 図、右はメンドサ絵文書 f.19 r)

表 4：レオン・イ・ガマ写本のボトゥリニ・コレクション絵文書類(太字は 2 か所以上に分散)

原本所蔵	絵文書名	原本所蔵	絵文書名
MNA	<u>Códice de Huamantla</u> (F.1～6) <u>Códices de Mizquiahuala</u> = (Poinsett Fragment 1, 2) Mapa Sigüenza (シグエンサ地図) Matrícula de Tributos (貢納表)	BNP	Códice Azcatitlan, Códice Cozcatzin Códice en Cruz, Códice Ixtlilxóchitl Códice Xólotl, Culto rendido al Sol Historia Tolteca-Chichimeca Tonalámatl de Aubin Piece d'un proceso-Xochimilco Recibos presentados-Chalco
DSB	<u>Códice de Huamantla</u> (F.7, 8) <u>Códices de Mizquiahuala</u> =CHF7,13, Rechung über gelieferte Naturalien	MARI	<u>Códices de Mizquiahuala</u> =Tira de tributo Ordenanza del Señor Cuauhtémoc
BM	Códice Aubin 1576		
RAH	Calendarios de Veytia	共同体	Lienzo de Tetlama

BM：大英博物館、BNA：メキシコ人類学博物館、BNP：フランス国立文書館、DSB：ドイツ国立文書館
MARI：チューレイン大学中米研究所、RAH：王立歴史アカデミア（マドリー）

歴史資料の確認を命じる勅令がヌエバ・エスパーニャ副王宛に届いた。1788 年 12 月末、副王フローレスはクラビヘロが言及した歴史資料は確認できなかったと、つれない返答を本国に送っていた。

この 1771 年から 1788 年の期間が、コレクションの散逸が一番激しかった時期だったと推定されている (Glass 1975: 475)。副王庁当局の緩慢な対応が続くなか、副王庁官吏で天文学者でもあったレオン・イ・ガマ (1735–1802 年) は、1780 年頃からメキシコの先住民の歴史に関する多くの未刊資料をコピーしていた。

彼がコピーしたのは、メキシコ大学に保管されていたコレクションやその他の個人所有の記録類だった (Moreno 1971: 258)。1802 年、レオン・イ・ガマの死去とともに、彼の手元に置かれていた絵文書類の原本や写本類の多くは、サンフェリペ・ネリ修道院長ピチャルド神父が受け継ぐことになった。フンボルトがメキシコに滞在する直前、コレクションの一部は修道院長ピチャルド神父の管理下にあったのである。表 4 はレオン・イ・ガマが写本を作成していたことが判明しているコレクションの絵文書類のリストである。彼が写本した絵文書類の原本自体は、メキシコやフランスなどの文書館に分散しているが、彼の写本の多くはフランス国立文書館に所蔵されている。フランス国立文書館にはピチャルド神父が作成したコレクションの写本も保管されている¹³⁾。

もとは500点以上あったはずのコレクションの古文書や絵文書類のうち、現時点でコレクションにあったことが判明しているのは約150点である。その内訳は、伝統的絵文書類が106点、17世紀以降に作成のテチアロヤン絵文書¹⁴⁾が4点、テストリアン絵文書¹⁵⁾が4点、そして絵文書のない古文書が39点となっている (Glass 1975: 478-483)。このうち伝統的絵文書に関しては、原本91点、写本4点、そして断片11点の存在が確認されている。91点の絵文書の原本は、メソアメリカの先住民族に関連する絵文書として確認されている絵文書の総数の2割強にも達する。その意味でも、コレクションがメキシコ中央高原のエスノヒストリー研究に不可欠な資料として有する意味は多大なものである。現在、コレクションの絵文書は、メキシコ人類学博物館 (BNA) に40点、国立フランス文書館 (BNP) に25点、そしてドイツ国立文書館 (DSB) に15点が所蔵されている。

(2) コレクションとフンボルト絵図断片の関係

クラビヘロの記述を基にして、フンボルトはコレクションをメキシコ大学文書館で探索していた。だが、大学には近年の写本と思われるものがいくつか残存していたにすぎなかった。その後、フンボルトは副王庁文書館の湿気の多い地下室でコレクションの一部と思われる3つの大きな梱包を発見することになった。廃棄文書といっしょだった梱包の状態は深刻で、開封するとバラバラになる恐れがあった。しかし、文書には番号が付き、注釈も見られ、整理されていたことを窺わせるものだった。フンボルトは、「この価値ある文書類の残りだけでも、なぜマドリーに送付しなかったのか？」と憤慨している。壁面に掛ける肖像画大の絵もあり、英国に送れば高値がつくと値踏みしている (Humboldt 1986: 331)。

フンボルトがメキシコで手に入れた絵文書類は、レオン・イ・ガマやピチャルド神父が手元に持っていたコレクションの一部であることは明白である。『先住民モニュメント』の「アスカポツァルコ貴族系譜」の説明文のなかで、「ボトゥリニ博物館」の一部に相当するレオン・イ・ガマ氏収集品から購入したと明記している (Humboldt 1813: 52)。フンボルトは、「この地の住民の移動を描いた大きな絵図」に4万ペソを支払うと申し出たとされている (Wright 2005: 438)。彼が購入した絵文書断片のうち、

15 点はドイツ国立文書館 (DSB) に所蔵されている。フンボルト絵文書断片 1 だけが、プロシア文化財団州立文書館所蔵となっている。一方、フランス国立文書館には、レオン・イ・ガマが作成し、ピチャルド神父から 1804 年 7 月に寄贈された「オーバン暦」(Tonalamatl Aubin) の写本が存在していることが確認されている。

表 5 は、フンボルト絵文書断片 16 点に関して、基礎的なデータを整理したものである。左欄から、断片番号、内容を示す通称名、大きさ (長さ x 幅、単位 cm)、対応すると思われるボトゥリニ・コレクションのカタログの節・項の番号、ならびにその記述内容を示している。16 点すべてが、アマーテ紙が竜舌欄に描かれている。

グラスの研究によると、フンボルト絵文書断片のうち、断片 9、10、11、12、14 の「貢納記録」に関しては、ボトゥリニのカタログに関連する明確な記述を見出すことができない。断片 9、10、11、12 の 4 点は、「インディオの紙の長さ 3 バラ [約 1.8m] 以上の帯状の図。村の名前不明」というカタログの 21 節 10 項に対応する可能性が高いとするグラスの推測 (Glass 1975: 480) は、どの断片も 3 バラ未満であることから、無理がある。一方、断片 14 には、カカオ豆、七面鳥、食料品などの貢納品目が描かれ、トラトンパン (Tlatonpan) という地名絵符があるが、具体的な場所は不明である。

表 5 : フンボルト絵文書断片とコレクション

	名 称	大きさ	カタログ	カタログ記載の説明
1	Tlapa 貢納、15folio	29x25	30-4?	オアハカ司教区から送付、折畳み、トルテカ暦?
2	土地所有図	68x40	7-8	複数の領主の家系の土地、モクテスマ
3	Códice Huamantla 7	91x65	20-2	8 x 2.25 バラ、17 集落の名称、 血の川、ウアマントラ礼拝堂で発見
4	Códice Huamantla 8	46x59		
5	Tezontepec センサス	42x16	21-9	Tezontepec など 4 集落、8 枚
6	テスココ王宮領地争論	20x21	3-7	4 切り紙、テスココ市、面積を示す表示
7	Recibo de Mizquiahuala 4	25x18	21-1	Mizquiahuala 住民の貢納、3 枚
8	土地所有図	22x33		
9	貢納	98x17	21-10?	3 バラ以上の帯状の紙、集落名不明
10	貢納	98x17	21-10?	3 バラ以上の帯状の紙、集落名不明
11	貢納	146x17	21-10?	3 バラ以上の帯状の紙、集落名不明
12	貢納	146x17	21-10?	3 バラ以上の帯状の紙、集落名不明
13	Recibo de Mizquiahuala 3	31x49	21-2	Mizquiahuala 住民の貢納
14	Tlatonpan 貢納	34x15		
15	七面鳥貢納	34x52	21-11	貢納の七面鳥多数
16	Testerian	35 x 45	25-2	図と数の小図、教えの神秘の説明

この断片14は、コレクションにあったことが判明しているプエブラ州のトラテンゴ (Tlatengo)¹⁶⁾ の1562年頃の貢納記録とほぼ同じ内容と構図で描かれている。そのことから、トラトンパンもプエブラ州の集落だった可能性は高い。

一方、断片15には324羽の七面鳥が描かれ、カタログ21節11項にある「貢納していた多数の七面鳥が描かれる図。場所不明」に対応するものと見なされている。断片5にはテソンテペック (Tezontepec) の9組の夫婦が描かれている。カタログ21節9項は、テソンテペックを含む4集落の「7枚の図」とされ、これと関連する可能性は高いだろう。

一方、断片2、断片3・4、断片6、断片7・13に関しては、ボトゥリニのカタログに対応することがほぼ確実と思われる記述を見出すことができる。断片2は、カタログ7節8項の「現時点で言えるのは、皇帝モテウクスマ (Moteuchzuma) に始まりキリスト教時代までの領主に至る複数の領主の家系に属する土地」という記述の通りの内容となっている。

断片3・4に関しては、カタログの20節2項に、「インディオの厚い紙に描かれ両面ともかなり破損した一葉の巨大な地図」という記載と関連している。長さ8バラ、幅2.25バラ (約6.7mx1.9m) の地図は、20節1項で言及された図とともに、トラスカラ州のウアマントラ (Huamantla) 管区の古い礼拝堂の廃墟にあった箱から、ボトゥリニが発見したという (Boturini 1974: 127)。ゼーラーも、断片3・4はメキシコ市博物館所蔵の絵文書 [ウアマントラ絵文書1-6] と同グループに属すると示唆している (Seler 1904: 187)。

断片6は、カタログの3節7項「4切りのインディオの紙にテスココ市の図面を描いた地図。昔の広さを明示した数値付き」に対応するというゼーラーの解釈は妥当なものである。しかし、ゼーラーは、区画の各辺にある数値は、ボトゥリニの説明している長さではなく、人口であると間違った解釈をしている (Seler 1904: 196)。

断片7・13は、「ミスキアウアラ領収書 (Los Recibos de Mizquiahuala)」と呼ばれる絵文書群の一部とみなせる。この絵文書群は、「帯状のインディオの紙に描かれた3つの図、ミスキアウアラン住民が納めた税に関するもの」として、カタログ21節1項に記載されている。21節2・3項では同じ村の似た図があるとされている

(Boturini 1974: 129)。つまり、「ミスキアウアラ領収書」は、少なくとも5部以上で構成されていたことになる。

グラスは断片1をカタログ30節4項に対応すると指摘している。しかし、「オアハカ司教区から私に送られた布地のように伸ばし折畳めるインディオの紙の地図。現時点で言えるのは、かの地の諸民族の暦の展開図で、トゥルテコ (tulteco) のシステムに準じて多くの事物、図と記号が並んでいる。解釈にはかなりの作業が必要で、断言はできないが、奇妙な図と記号で儀礼や儀式の様子を覆い隠している」という記述は、現ゲレロ州のトラパ (Tlapa) 地方の貢納記録とされる断片1と必ずしも符合するものではない。植民地期を通じて、トラパ地方はオアハカ司教区ではなくトラスカラ司教区に属していたからである。

フンボルト絵文書断片のすべてに関して、コレクションのカタログに対応するものを探し出すことはできない。しかし、フンボルト絵文書断片はすべてボトゥリニのコレクションに属していたものと見なしてよいだろう。ただし、フンボルトが1803年のメキシコ滞在時に閲覧できたコレクションはすでに完全なものではなかった。それゆえ、『先住民モニュメント』所収の挿絵の原本をフンボルトが実際に確認していたとは断定できない。実際、フンボルトは、コレクションにあるはずのシグエンサ地図¹⁷⁾の原本を大学文書館で探したが、原本を見つけられなかったと告白している (Humboldt 1813: 224)。そのためか、『先住民モニュメント』に掲載されているシグエンサ地図の挿絵は、ジェメリ・カレリ『世界一周』の図版を左右逆転したものになっている (図6参照)。フンボルトは、これとは別種のアステカ移動の記録がいくつも作成されていたと述べている。その例として、パチカン絵文書、ベレトリのボルジア

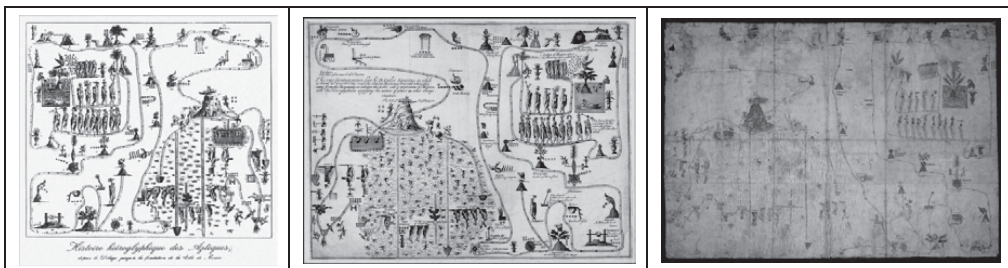


図6：アストラン出発からメキシコ創設の図

(左『先住民モニュメント』付図、中ジェメリ・カレリ『世界一周』付図、右シグエンサ地図原本)

絵文書、メンドサのコレクションとレオン・イ・ガマのコレクションを挙げている。

Thierner-Sachse は、フンボルトがボトゥリニ・コレクションでもっとも代表的な絵文書「ボトゥリニ絵文書」、いわゆる「巡歴絵図 (Tira de la peregrinación)」を実見したと推定している (Thierner-Sachse 2003: 16)。しかし、レオン・イ・ガマのコレクションに「巡歴絵図」が含まれていたかどうかは判断できない。『政治論』のなかには、「巡歴絵図」に登場するアステカ移動中の地名アココルコ (Acocolco) などに関する言及がある (Humboldt 1973: 113)。しかし、そうした地名の多くはクラビヘロやトルケマダの著作でも言及されている。それゆえ、フンボルトが実際に「巡歴絵図」を閲覧したと、即断することはできない。

IV. フンボルト絵文書断片に関連する絵文書資料

『先住民モニュメント』でフンボルトが個々のフンボルト絵文書断片に関して行っている記述や分析は、「急ぎ足的なもの」であり、本格的な分析が欠如してことは、既述したとおりである。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツ人文献学者ゼーラーは、フンボルト絵文書断片16点に関して、詳細な分析と解説を行っている (Seler 1904; 1903)。しかし、絵文書資料が作成された歴史的文脈が十分に解明されておらず、現時点から見れば不十分としかいえないものもある。だが現在では、フンボルト絵文書断片が属していたと思われる元の絵文書資料が判明したことなどで、こうした問題の解決の手掛かりができる状況となっている。

絵文書断片のテキストとしての関連性をもっとも明白になったのは、フンボルト絵文書断片1である。1940年にメキシコ・ゲレロ州東部海岸アソユー村で、エヒードの境界線策定作業中に発見された『アソユー絵文書2』の裏面に、断片1とまったく同じ形式の貢納の記録が描かれていたのである。アソユー村では、『アソユー絵文書1』とトラパ絵布 (Lienzo de Tlapa) も発見されている¹⁸⁾。フンボルト絵文書断片3・4に関しては、1980年代以降、それが属するウアマントラ絵文書の復刻・刊行や全体の構成に関する研究が進展している。また、フンボルト絵文書断片6の王宮と同じ構図の地図が、米国議会図書館所蔵のオストティクパック土地図 (Oztoticpac Land

表 6：フンボルト絵文書断片

フンボルト絵文書断片		絵文書断片と関連する類似の絵文書	
	名 称	名 称	所蔵機関
1	Tlapa 貢納(1504~1522 年)	Código Azoyú 2 Reverso 貢納 (1486~1498 年)	BNA
3, 4	Código Huamantla 7,8	Código Huamantla 1~6	BNA
6	Oxtotitpac 王宮土地争論	Mapa de Oxtotitpac (75x84) の第 2 セクション	LC
7	Recibo de Mizquiahuala4	Poinsett Fragment 1, 2	BNA
13	Recibo de Mizquiahuala3	Tira de Tributo	MARI
14	Tlatonpan 貢納 34x15	Rôle des Impôts de Tlatengo, 170x20	BNP
8	土地所有図 33x22	Código Vergara? 31x22、55 葉	BNP
2	土地所有図	Código Santa Anita Zacatlalmanco? 43x52	MH

BNA：メキシコ人類学博物館、BNP：フランス国立文書館、LC：米国議会図書館

MARI：チュレイン大学中米研究所、MHP：人類博物館（パリ）

Map) の 1 セクションに描かれていることが、1960 年代に研究者によって確認されている¹⁹⁾。また、コレクションのカタログ 21 節 1・2・3 項に記載されていた「ミスキアウアラの貢納記録」の 5 点に関しても、フンボルト絵文書断片 7・13 以外にも、4 点の貢納記録の存在が確認されている (Wright 2005: 478-489)。さらに既述したように、フンボルト絵文書断片 14 に関しては、酷似した貢納品目、記載様式の絵文書が確認されている。

以下では、フンボルト絵文書断片 1 と断片 3・4 の 2 点を取り上げ、断片と関連する絵文書資料との関係性について整理したい。

(1) フンボルト絵文書断片 1 と『アソユー絵文書 2』裏面の貢納記録

『アソユー絵文書 1』は、38 枚のフォリオ (23.3cmx20.5~21.3cm) が屏風状に連なる絵文書である。両面の情報は、第 1 部の年代記 (表面 38 フォリオ)、第 2 部の領主の系譜 (裏面 6 フォリオ)、そして第 3 部の領主と領域図 (裏面 5 フォリオ) の 3 部で構成されている。第 1 部の年代記 (以下、「年代記 I」と略) では、1 フォリオに 7 年分 (右辺 3 年、上辺 4 年) の事件が記載され、紀元 1300 年からスペイン植民地時代の 1565 年まで間断なく続いている。

一方、『アソユー絵文書 2』は、15 枚のフォリオ (22x27cm) が屏風状に連なる絵文書である。両面に描かれている情報は、第 1 部の年代記 (表面 15 フォリオ) と、

第 2 部の貢納記録（裏面 11 フォリオ）からなる。第 1 部の年代記（以下、「年代記 II」と略）では、1 フォリオに 8 年分（右辺 4 年、上辺 4 年）の出来事が記載され、紀元 1429-1564 年の期間をカバーしている。だが、1501-1516 年の 16 年間分が欠落し、少なくとも 2 フォリオが欠落していると推測できる。一方、『アソユー絵文書 2』の貢納記録（以下、「貢納記録」と略）は 1486 年から 1499 年までだが、1489 年から 1491 年分に該当する 2 フォリオが欠落している。

『アソユー絵文書 1・2』の年代記 I、年代記 II、そして「貢納記録」における年代表記は、いずれも先住民族トラパネカの暦法に基づいて描かれている（図 7 参照）。トラパネカの年代表示は、2 から 14 の数字と動き、風（di'yan）、鹿（ayan'）、草（mi'yan）の 4 記号の組合せで示されている。一方、アステカの年代表記システムは、1 から 13 の数字と家（calli）、兎（tochtli）、芦（acatl）、石刀（tecpatl）の 4 記号の組合せで示されている。ちなみに、図 7 の左の「年代記 I」フォリオ 1 は、「3・動き（1300 年）」から「9・鹿（1306 年）」に対応する 7 年間である。この時期、トラパネカ・ナワ系の領主「死・太陽」とミステカ系領主「10・鹿」がトラパ・トラチノリャン地方（Tlapa-Tlachinollan、以下トラパ地方と略）の統治を分担していたことを示している。図 7 の右の「年代記 II」フォリオ 17 は、「13・風（1557 年）」から「7・動き（1564 年）」の 8 年間で、この地方の統治権が先住民領主「兎」から取り上げられ、スペイン人当局者に移行したことが描かれている²⁰。

フンボルト絵文書断片 1 は、『アソユー絵文書 2』裏面の貢納記録とまったく同じ構図と内容となっている（図 8 参照）。両者とも、各フォリオは縦横 5 つのコラムで構成されている。右端のコラムにはトラパネカの年代表記が記されている。右から 2 番目のコラムには、貢納が納められる 4 期に対応する月を示す暦絵符が描かれている。残る 3 つのコラムには、金粉、金延べ棒、衣類など貢納品が描かれている。また、右端や左端、左から 2 番目のコラムには、領主の即位・死去、征服など歴史事件が記載されることもある。

図 8 左側の「貢納記録」フォリオ 8v は、アステカの征服によりトラパ地方の領主の貢納が始まった時の記録となっている。最下辺に 4 名の人物と 1 つの地名絵符が描かれている。右から 2 番目のコラムの地名絵符は、この地域の中心地であるトラパ



図7：『アスユー絵文書』（左「年代記Ⅰ」f.1：1300～06年、右「年代記Ⅱ」f.17：1557～64年）

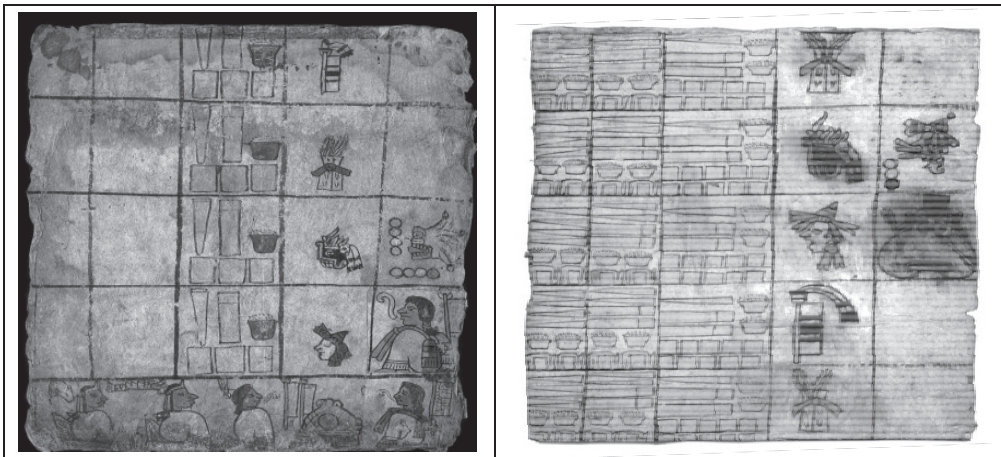


図8：トラパ地方の貢納記録（左「貢納記録」f.8v、右フンボルト絵文書断片f.1）

ン（Tlapan）を示す。この地名絵符は、網目のある山の絵符の中央に「染色された色（tlapalli）」の円が描かれ、左上に2本の旗が付いている。「メンドサ絵文書」では、トラパンを示す地名絵符は、赤色の丸い円の中に人の足跡で示されている。パンの音価が、前者では「旗（pantli）」、後者では動詞の「歩く（paina）」によって示されている²¹⁾。

地名絵符の左には、トラパ地方の官吏クイアウィトル（Quiahuitl）と玉座に座った領主2人が描かれている。左端の領主はヒーローテ（Jilote）の絵符、その右の領主はシウコアトル（Xiuhcoatl）の絵符で示されている。一方、首に赤い布を巻き、旗をつけた右端の人物は、トラパ地方を征服したアステカの貢納徴税官（calpixque）である。この上にもう一人のアステカ貢納徴税官が描かれている。下から3段目の左

端の絵符「8・草」は1487年を示す。1481年からアステカの侵攻を受けてきたトラパ地方の領主たちはこの年からアステカに貢納を納めることになった。

「貢納記録」とフンボルト絵文書断片1のどちらとも、下から上に向かって解読する。年を示す暦絵符はトラパネカ暦の体系が採用されているが、月を示す4つの暦絵符はアステカ暦と共通している。トラパネカもアステカも、月(20日) $\times$ 18 + 5日 = 365日というメソアメリカ共通の太陽暦を用いていた。貢納は4期に分けて納められていた。それに対応する雨神トラロック、箒、旗、シペ神の記号で示される4つの月は、西暦の3月、5月、9月、11月に当たる。しかし、トラパネカ暦の1年はエツァクアリストリ(Etzelqualiztli、西暦5月24日-6月12日)から始まるので、年の記号は雨神と同列に記載されている。

前述したように、『アソユー絵文書2』の裏面「貢納記録」がカバーする年代は、紀元1487年から1499年だが、1489年から1491年までが欠落している。一方、フンボルト絵文書断片1がカバーする年代は、1504年から1522年までとなっている。両者を合わせると、1487年から1522年までの35年間にわたる貢納記録になる。「貢納記録」とフンボルト絵文書断片1を繋ぐ1499年から1503年までの期間に対応する記録は、現時点で確認されていない。しかし、「貢納記録」の1489年から1491年分の2フォリオ、ならびに両者の間の4フォリオ分に相当する貢納記録があったことは疑いない²²⁾。

トラパ地方からアステカへの貢納の品目や量は、35年間にいくつもの変化が見られる。1487年から1510年までは、貢納品目の記載は3番目の1欄だけに記載されている。しかし、1511年から1514年にかけては2欄、そして1515年以降は3欄に増えている。貢納の品目や量の変化は、トラパ地方とアステカの政治関係の変化に対応していることは明白だが、こうした問題点に関する考察は別稿に譲りたい。

(2) フンボルト絵文書断片3・4とウアマントラ絵文書

フンボルト絵文書断片3は、アステカがメキシコ盆地の北や西に居住していた野蛮なオトミなどの狩猟民族に対して16世紀に展開した征服戦争を描写したものであると、フンボルトは指摘している。また、左端にある水色と赤色の水流が交差した二つ

の記号は湿地帯を示し、右端に向かう二つの足跡の列は戦士集団アステカの移住を示すものであるとしている。また、アステカ征服者の多くが右手に防御用の楯、左手に攻撃用の武器を持っていることは奇妙だが、「ティソックの石」の浮き彫りやエジプトの浮き彫りなど、左右対称の図像を描く際にしばしば見られる現象と、フンボルトは解釈している (Humboldt 1813: 237-38)。

フンボルト自身は、フンボルト絵文書断片 3・4 がウアマントラ絵文書の一部であることをまったく知らなかったと思われる。だが、ゼーラーが指摘したように (Seler 1904: 178)、フンボルト絵文書断片 3・4 は、ボトゥリニのカタログ 20 節 2 項で示されているウアマントラ絵文書 (Códice o Mapa de Huamantla) の一部であることは明白である。

カタログ 20 節 2 項には、「異教時代に集落間同士の残酷な戦争の粗雑な絵。その集落は、Hecatèpec、Huyatèpec、Amoltèpec、Nièntlah、Tzatzacquàlan、Hueymètlan、Coltèpec、Antlacaltèpec、Tepechàlla、Xiquipilco、Achalàlan、Zayutèpec、Teconhùac、Totolhuitzòcan、Yahueyòcan、Zacatzòtlah、Mazapila などである。血の流れる川や生贄の捕虜が示す戦いの残酷さ。クアウマンコ (Quauhmanco = Cuauhmantlan) への偉大なるコルテスと聖フランシスコ修道会神父たちの到着」と記載されている。

ここで言及されている集落のうち、Yahueyòcan、Zacatzòtlah、Mazapila は、フンボルト絵文書断片 3 の右辺にある 3 つの集落、ヨウアルヨカン (Yahualyohcan)、サカテオトラン (Zacateotlan)、マサピルテペック (Mazapiltepec) に対応することは明らかである。現トラスカラ州ウアマントラ市の南東 30km に位置するこの 3 集落は、ウアマントラ絵文書断片 3 にも登場する。ウアマントラ絵文書断片 3 (187cm x 95cm) とウアマントラ絵文書断片 4 (181cmx91cm) で示す範囲の中心にウアマントラ (Cuauhmantlan) が位置している。ウアマントラ絵文書断片 3・4 で描かれる範囲は、左下隅のメトラン (Metlan) から時計回りに、アモルテペック (Amoltepec)、テコアック (Tecoac)、ウェイメトラン (Hueymetlan)、クアウピアストラン (Cuauhpiasztlan)、ソルテペック (Coltepec)、ヨウアルヨカンなどで囲まれた地域である。このうち、アモルテペック、ウェイメトラン、ソルテペックの 3 つは、カタク

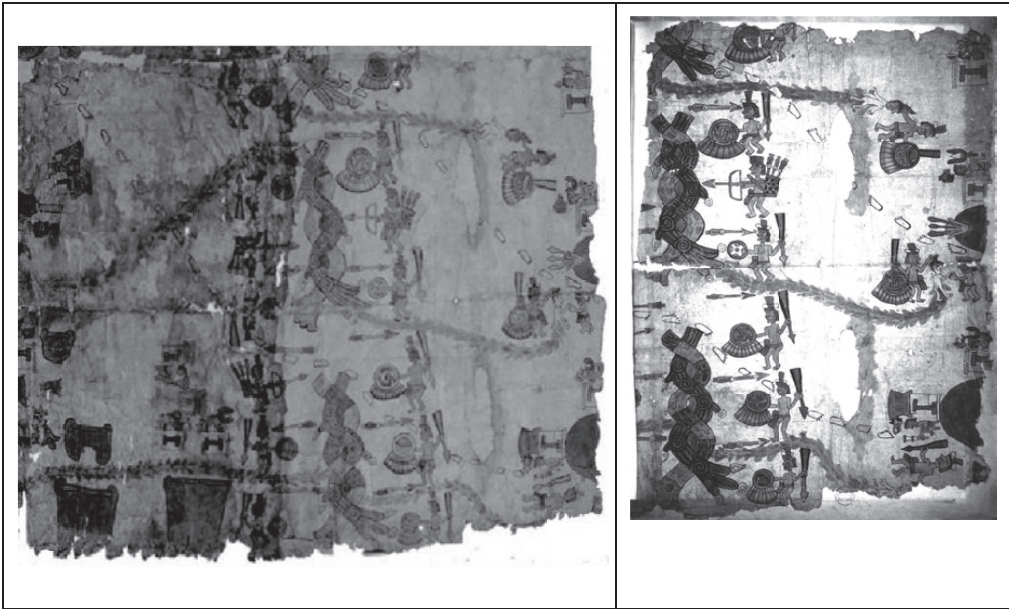


図9：ウアマントラ絵文書断片3右下隅とフンボルト絵文書断片3

グ20節2項で言及されている Amoltèpec、Hueymètlan、Coltèpec に対応している。

ウアマントラ絵文書断片3の右端の4分の1は、フンボルト絵文書断片3と同じ範囲を描いたものとなっている。この部分は、左の残りの4分の3とは異なった料紙に描かれている。この料紙の差異から、この部分の劣化、あるいは散逸にともない、後に補修された可能性は否定できない。その散逸した部分の一つがフンボルト絵文書断片3であったことも想定できる。ウアマントラ絵文書断片3とフンボルト絵文書断片3を比較するために並べて図示した図9からは、両者の図像の描き方に微妙な差異を看取できる。最大の差異は、フンボルト絵文書断片3の方が、ウアマントラ絵文書断片3にくらべ、右端の解れや劣化による図面の欠如が少ないことである。

ウアマントラ絵地図断片1～6とフンボルト絵文書断片3・4を合わせた8つの断片が、ウアマントラ絵文書の全体の中で占めている位置を復元する作業は、Aguilera や Wright らによって試みられている (Aguilera 1984: 33-35, Wright 2005: 446-448; 2010: 2)。現在確認されている8断片をもとに再構成されたモデルは、図10に示したものとなっている。ボトゥリニのコレクションに記載されている原図の大きさ横8バラ x 縦2.25バラ (約7m x 1.9m) から想定される総面積13.3平方メートルに対して、現在確認されている8断片の総面積は約7割強である。そこから残る2割に該当する

断片	大きさ	面積	該当地域	断片	大きさ	面積	該当地域
1	114 x 47	0.5358	Teotihuacan 周辺	2	160 x 95	1.5200	Tenochtitlan 周辺
3	187 x 95	1.7765	Zoltepec 周辺	4	181 x 91	1.6471	Huamantla 周辺
5	242 x 95	2.2990	Tiltepec 周辺	6	50 x 178	0.8900	Chiapa/Chicomoztoc
7	66 x 95	0.6270	Mazapiltetec 周辺	8	32 x 48	0.1536	Cuahpechco 周辺
総計		9.6890		原図	700 x 190	13.0600	

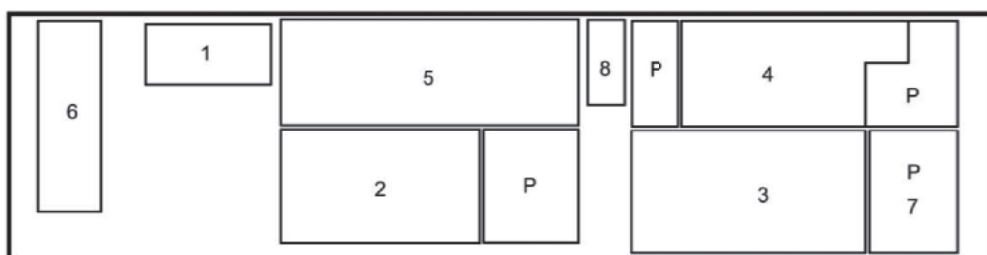


図 10：ウアマントラ絵文書の構成復元図（7・8 はフンボルト絵文書断片 3・4、P は継ぎ部）

出典：Wright (2010: 2)

未発見の絵文書断片の存在が推定できる。

フンボルトが湿地帯の表現と解釈し、ボトゥリニのカタログで「血の流れる川」と表現されているものは、アトル・トラチノリ (atl tlachinolli = 水と火) を示す水色と赤色の水流が交差する形で描かれたものである。これは実際には「戦争」を意味する隠喩的記号である。この戦争を示す記号は、ウアマントラ絵文書 3・4 に 5 か所、ウアマントラ絵文書 5 に 1 か所、合計 6 か所に描かれている。

フンボルト絵文書断片 3 の戦争を示す水流の右側の戦士が闘っている相手は、フンボルト絵文書断片 3 の左端には描かれていない。しかし、ウアマントラ絵文書断片 3 では、水流の左側の戦士集団が描かれている。ウアマントラ絵文書断片 3・4 の 5 列の水流の記号を挟んで描かれている戦士集団の武具・衣装類に、若干の差異を観察することはできる。右側の戦士が持っている楯には羽毛飾りが付けられているが、左側の戦士の楯には飾りがない。このことから、フンボルトが述べたように、前者を「文明化したアステカ」、後者を「野蛮なオトミ」として推定できるかもしれない。

フンボルト絵文書断片 3 には、戦争を示す交差した水流とは別に、朱色をした水流が 3 つ描かれている。それらの水流はすべて戦闘シーンにおいて右端の戦士集団に頭髮を掴まれた捕虜の下半身から流れ出ている。このことは、右側の戦士の属する民族

集団の集落などにおいて、戦争捕虜の生贄儀礼が執行されたことを示唆している。

フンボルト絵文書断片3の右端に描かれた（勝利者側の）民族集団の正体を確認するためには、彼らの居住している集落相互を結んでいる「人の足跡」を探る必要がある。ウアマントラ絵文書全体に広がる「人の足跡」は民族集団の移動のルートを示すものである。その起点は、ウアマントラ絵文書全体の左端に位置する断片6に描かれた〇型の洞窟を起点としている。この洞窟はチアパン（Chiapan）と解釈され、現在のメキシコ州チアパ・デ・モタ（Chiapa de Mota）に推定されてきた²³⁾。「人の足跡」が示す移住ルートによると、民族集団はこの洞窟を出発し、テペチュパン、オトンプン（Otompan）といったメキシコ盆地北部を経由し、いったんウアマントラに立ち寄っている。その後、フンボルト絵文書断片3に描かれているヤウアルヨカン、サカテオトランを経て、最終的にウアマントラに定住したことになる。従来の研究者の大半は、この民族集団をオトミ系であると見なしてきた（Aguilera 1984: 42-43, Wright 2005: 433）。その根拠とされるのは、移住の起点と終点であるチアパ・デ・モタとウアマントラ周辺が伝統的に先住民族オトミの居住地域であったという歴史的事実である。しかし、オトミではなくチチメカ（Chichimeca）である可能性もあるという指摘（Güemes 2001）もあながち否定できるものではない。

結びにかえて

本稿のベースとなったものは、2013年度の史学研究会大会（2013年11月2日、京都大学文学部）で行った発表「メキシコのエスノヒストリー研究とフンボルト将来の絵文書資料」である。本稿では、当日の発表で詳しく展開できなかったフンボルト将来の16点の絵文書断片に関する文献学的検討に焦点を当てて議論を展開してきた。16点の断片のうち、今回IV章で紹介したフンボルト絵文書断片1と断片3・4は、それぞれアソユー絵文書2とウアマントラ絵文書という大部の絵文書の一部であることが判明している。

しかし、オストティクパック土地図と関連していることが判明しているフンボルト絵文書断片6を除いては、残りの12点のフンボルト絵文書断片は、関連資料が少なく、歴史的文脈の中に位置づけて分析することが難しいものばかりである。それゆ

え、現時点においては、今回 IV 章で紹介したような分析や考察を行うことができない。既往の研究では、それらの絵文書断片に見られる人名絵符、地名絵符の分析を通じて、書記システムを明らかにするための素材としてしか扱われてこなかったといつてよい。このような手法は、フンボルト自身がフンボルト絵文書断片に関して行った分析の手法とほぼ共通しているものである。そうした作業が不可欠とはいえ、いくつかのフンボルト絵文書断片に関しては、絵文書が作成された歴史的文脈の中で断片の内容と意味を分析するという段階に進むべきことは言うまでもない。

注

- 1) フンボルトは 1791–92 年にフライブルク鉱山学校で鉱山学を学び、同期の学生にはアンドレス・デル・リオがいた。
- 2) セセ・イ・ラカスタは、大量の植物標本と『メキシコ植物相 (la Flora Mexicana)』の草稿を携え、1804 年にスペインに帰国する。
- 3) 副王に献呈した小冊子のコピーは国立メキシコ文書館に保管され、小冊子はフンボルト自身の手では出版されず、1811 年にボコタ、1822 年にメキシコで出版されている。
- 4) 英国のキングスボロー卿 (Lord Kingsborough) が刊行した『メキシコの古代文物』(Antiquities of Mexico) 第 2 巻にフンボルト絵文書断片 1 (219-231 頁) と断片 2 (231-234 頁) が復刻出版されている。イタリア人絵師アグステイノ・アグリオが模写したもので、大英博物館には彼が複写したフンボルト絵文書断片 15 点が保管されている。
- 5) 『先住民モニュメント』の図版 46・47・48「ウィーン帝国文書館アステカ草稿絵文書 1–3」で、フンボルトは 1811 年にウィーンを訪問し、De Hammer の好意で絵文書の 3 ページ分を彩色付きでコピーしたと述べている。
- 6) 1813 年版の『先住民モニュメント』の見開き表紙には、「パリ、Chez F. Schoell, 1810 年」と表記されているが、序論の最後の部分には 1813 年 4 月パリと記されている。
- 7) 1790 年 8 月にコアトリクエ巨像、12 月に太陽の暦石、そして翌 1791 年 12 月にティソックの石が発見されている。前二者については、1792 年にレオン・イ・ガマが詳細な報告書を発表している (León y Gama 1979)。ティソックの石に関しては、小林 (2012) 参照。
- 8) この挿絵の点数は、フンボルトが序論の部分で言及している表 (Humboldt 1813: iii-iv) に基づくものである。しかし『先住民モニュメント』には、序論で言及されていない「メキシコ中央広場景観」の挿絵なども所収されている。
- 9) 代表的なのは、1790 年に発見されたコアトリクエ巨像に関するレオン・イ・ガマの報告書にある正面、背面、側面、底面の図版 (León y Gama 1979: 49-52) である。
- 10) 不十分で部分的な復刻としては、追放イエズス会士ファブレガ (José Lino Fábrega) の手で 1792 年に刊行されたものがある (表 3 参照)。
- 11) フンボルト絵文書断片 2 に描かれている先住民統治者のリストから、この断片はアスカポツァルコではなくトラテロルコに関連するものと考えた方が妥当である。
- 12) 『メキシコ劇場』は、ヌエバ・エスパーニャ副王領の統治史、政治行政地区の概要を説明する

資料として用いられている。

- 13) フランス文書館所蔵のメキシコ関係の絵文書や古文書は、2009 年にメキシコの CIESAS から Amoxcalli. La casa de los Libros の題で CD として刊行されている。
- 14) テチアロヤン絵文書 (Código Techialoyan) は、1685 年から 1703 年頃にかけ、メキシコ盆地周辺の共同体で同一の制作集団が作成した共同体権原証書 (Títulos primordiales) の一種である。内容に史実と異なることが多くあるため、当初は偽文書と扱われてきたが、現在確認されている約 50 点のなかにはユネスコ記憶遺産指定を受けているものもある。
- 15) テステリアン絵文書 (Código Testeriano) は、テストラ (Jacobo de Testera) 神父が考案・実践したとされる先住民のキリスト教化用イラスト付き手引き本の総称で、先住民言語を理解できない宣教師が絵を使って教義を教えるようにしたものである。カタログでは、「図と数を使ったキリスト教義本 (doctrina cristiana en figuras y cifras)」となっている。
- 16) Tlatengo の貢納図 (175x20cm) の裏面の注記から、トラテンゴの 9 つの付属村の貢納が記録されていたことが判明する。
- 17) シグエンサ地図の特異な構図に関しては小林 (1989) を参照されたい。
- 18) 『アソユー絵文書 1』の復刻・研究については Vega (1991)、『アソユー絵文書 2』の復刻・研究については Vega y Oudijk (2012) を参照されたい。
- 19) 両者の関係を最初に指摘したのは Cline (1966; 1968) だが、その後の研究などを踏まえて両者の関連を論じたことがある (小林 1995: 166-172)。
- 20) 『アソユー絵文書 1』に基づいたトラパ地方の年代記、暦法などに関しては Vega (1992) を参照されたい。
- 21) トラパ (Tlapa) という地名はトラルパン (Tlalpan) の転化したもので、「土地 (tlalli)」と地名接尾辞「の上に (ipan)」で構成されるという『アソユー絵文書 1・2』の地名絵符を分析した研究の見解は間違っている (Gutiérrez y Constantino 2008: 88-89)。
- 22) 『アソユー絵文書 2』裏面の「貢納記録」とフンボルト絵文書断片 1 に基づくトラパ地方の貢納記録の原本の復原に関しては Gutiérrez, König y Brito (2009) を参照されたい。
- 23) Güemes は、この洞窟を 11 世紀以降メキシコ中央高原に移動してきた諸民族の起源地に関する神話に登場するチコモストック (Chicomoztoc) とみなしている (Güemes 2001)。

参考文献

小林 致広

- 1986 「メキシコ古代研究者としてのフンボルト」『人文地理学の視園』(水津一郎先生退官記念事業会編、大明堂)、1-15.
- 1989 「約束された終点と創出された起点」『絵図のコスモロジー』(葛川絵図研究会編、地人書房)、下巻:257-270.
- 1995 『われらが先祖の教えに従いて—1530 年代テスココ先住民に対する異端審問記録の分析』神戸外大研究叢書 26.
- 2013 「メシーカ征服活動と石彫モニュメント」『京都大學文學部研究紀要』52: 287-321.

Aguilera, Carmen

1984. *Código de Huamantla, manuscrito de los siglos XVI y XVII, que se conserva en la Sala de Testimonios Pictográficos de la Biblioteca Nacional de Antropología e Historia y en la*

- Biblioteca Estatal de Berlín*. Tlaxcala: Instituto Tlaxcalteca de la Cultura.
- Boturini Benaduci, Lorenzo
- 1974 *Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional*. México: Editorial Porrúa.
- Brand, Donaldo
- 1959 Humboldt's Essai politique sur le Royaume de la Nouvelle Espagne. In *Alexander von Humboldt: Studien zu seiner universalen Geisteshaltung*, edited by Joachim H. Schultze, pp. 122-41. Berlin: Walter de Gruyter.
- Clavijero, Francisco Javier
- 1964 *Historia antigua de México*. México: Editorial Porrúa.
- Cline, Howard
- 1966 The Oztoticpac Lands Map of Texcoco, 1540. *Quarterly Journal of the Library of Congress* 23-1: 75-115.
- 1968 The Oztoticpac Lands Map of Texcoco, 1540: Further notes. *Actas y Memorias de 37th ICA*, vol. 3, Buenos Aires.
- Gailemin, Bérénice
- 2012 Prie en suivant les sillons: lectura d'un catechism pictographique mexicain conservé à Berlin. *Cahiers de Amériques latines* 67: 29-52.
- Galarza, Joaquín
- 1979 *Estudios de escritura indígena tradicional Azteca-Nahuatl*, México: Archivo General de la Nación.
- Glass, John
- 1975 The Boturini Collection, In *Handbook of Middle American Indians*, vol.15, edited by Howard F. Cline, pp.473-486. Austin: University of Texas Press.
- Güemes, Lina Odena
- 2001 El código de Huamantla: ¿otomíes o chichimecas? (avances de investigación), en *Patrimonio histórico y cultural de México, IV Semana cultural de la Dirección de Etnología y Antropología Social*, María Elena Morales Anduaga y Francisco J. Zamora, Quintana, coordinadores, pp. 113-130. México: INAH.
- Gutiérrez, Gerardo
- 2010 Un análisis económico del Código Humboldt Fragmento 1 y Código Azoyú 2 reverso. *Cuarta Mesa Redonda. El conocimiento antropológico e histórico sobre Guerrero, "Movimientos sociales: causas y consecuencias" DVD. Taxco*.
- Gutiérrez, Gerardo y Constantino Medina Lima
- 2008 *Toponimia náhuatl en los Códices Azoyú 1 y 2. Un estudio crítico*. México: CIESAS.
- Gutiérrez, Gerardo, Viola König y Baltazar Brito
- 2009 *Código Humboldt Fragmento 1 Ms. Amer2 y Código Azoyú 2 Reverso. Nómina de tributo de Tlapa y su provincia al Imperio Mexicano*. México-Berlin: CIESAS/Stiftung Preussischer Kulturbesitz.
- Hamy, E.T.
- 1904 *Lettres américaines d'Alexandre de Humboldt (1798 – 1805)*. Paris: Librairie Orientale et

- Américaine.
- Humboldt, Alexander von
- 1810 *Veus des cordillères, et monumens des pueples indigènes de l'Amérique*. 2 vols. Paris: Schoell.
- 1810b *Pittoreske Ansichten der kordilleren und Monumente der Americanischer Völker*. Tübingen: Cotta.
- 1812a *Veus des cordillères, et monumens des pueples indigènes de l'Amérique*. Paris: Lib. Grecque-Latine-Allemande.
- 1812b *Atlas géographique et physique du Royaume de la Nouvelle-Espgna*. Paris: G. Dofour et Cie.
- 1813 *Veus des cordillères, et monumens des pueples indigènes de l'Amérique*. Paris: Schoell.
- 1814 *Researches concerning the Institutions and Monument of Ancient Inhabitants of America with Descriptions and Views of Some of the Most Striking Scenes in the Cordilleras*. London: Longman, Hurst, Rees, Orme & Brown, John Murray & H. Colburn.
- 1818 *Ensayo político sobre el Reino de la Nueva España*. Madrid: Núñez.
- 1878 *Sítios de las cordilleras y monumentos de pueblos indígenas américas*. Madrid: Gaspar.
- 1973 *Ensayo político sobre el Reino de la Nueva España*. México: Editorial Porrúa.
- 1986 *Aportaciones a la antropología mexicana*. Estudio y traducción de Jaime Labastida. México: Katun.
- 1986 *Reise auf dem Rio Magdalena, durch die Anden und Mexiko. TeilI: Texte*. Berlin: Akademie Verlag.
- 1995 *Vistas de las cordilleras y monumentos de pueblos indígenas de América*. 2 vols. México: Siglo XXI Editores.
- Kingsborough, Lord
- 1831 *Antiquities of Mexico*, vol. 2. London: Robert Hawvell, Jane Moyes & Richard Taylor.
- León-Portilla, Miguel
- 1974 Estudio preliminar, en *Idea de una Nueva Historia General de la América Septentrional*. pp. IX-LV. México: Editorial Porrúa.
- León y Gama, Antonio de
- 1979 Descripción de las dos piedras, en *Trabajos arqueológicos en el centro de la Ciudad de México (Antología)*, coordinado por Eduardo Matos Moctezuma, pp. 27-54. México: INAH.
- Moreno Bonett, Margarita
- 1978 Veytia: la vida y la obra. *Boletín del Instituto de Investigaciones Bibliográficas* 1977: 479-533.
- Moreno, Roberto
- 1971 La colección-Boturini y las fuentes de la obra de Antonio de León y Gama. *Estudios de Cultura Nahuatl* 7: 253-270.
- Ortega y Medina, Juan A.
- 1973 Anexo I: Cronología Humboldtiana. Datos de la Vida de Alejandro de Humboldt. En *Ensayo Político sobre el Reino de la Nueva España*. México: Editorial Porrúa, pp. lv-

cxxi.

Seler, Eduard

1903 Die Mexikanischen Bilderhandschriften Alexander von Humboldt in der Königl. Bibliothek zu Berlin. *Gesammelte Abhandlungen*, Bd.1, 162-300.

1904 The Mexican Picture Writings of Alexander von Humboldt in the Royal Library at Berlin, *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 28: 123-229.

Thiemer-Sachse, Ursula

2003 El “Museo histórico indiano” de Lorenzo Buturini Benaduci. *Humboldt in Netz*, IV-6: 1-22.

Vega Sosa, Constanza

1991 *Códice Azoyú 1. El reino de Tlachinollan*, México, Fondo de Cultura Económica.

1992 The Annals of the Tlapaneca, *Supplement to the Handbook of Middle American Indians*, vol. 5, edited by Victoria Reifer Bricker, pp. 34-52. Austin: University of Texas Press.

Vega Sosa, Constanza y Michel R. Oudijk

2012 *Códice Azoyú 2. El señorío de Tlapa-Tlachinollan*. México: Fondo de Cultura Económica/ INAH.

Veytia, Mariano

1944 *Historia antigua de México*. 2 tomos, México: Editorial Leyenda.

Wionczek, Miguel S.

1974 Orígenes de Vistas de las cordilleras y monumentos de los pueblos indígenas de América de Alejandro de Humboldt, en *Aportaciones a la antropología mexicana*. Alejandro de Humboldt, México: Editorial Katun, pp.xi-xxi.

Wright Carr, David Charles

2005 *Los olmecas: cultura, lengua y escritura*. Tesis Doctorado en Ciencias Sociales. 2 vols. Zamora: El Colegio de Michoacán.

2010 Historia, legitimación y relaciones interétnicas en el Mapa de Huamantla, *Memorias de 53° ICA*.